



ブック

新井氏は、生の基本的読解力に懸念を抱いて、RST（読解力調査）を開発した。これは、AI（人工知能）の正解率が80%を超える「係り受け」や急速に研究が進んでいる「照応」と、AIにはまだ難しいと考えられている「同義文判定」、AIにはまったく歯が立たない「推論」「イメージ同定」「具体例同定」の六つの分野で構成される。「理解できなければその人が不利益を被る題材」として、教科書から出題し、累計2万5000人の小中高生のデータを収集した。

AIは、憶えたり計算したりすることは容易でも、教科書に書いてあることの意味を理解するのは苦手だ。それは日本の中高生も同じで、AIで対処できない新しい仕事は、多くの人間にとっても苦手な仕事である可能性が非常に高い。それゆえ、

AI vs. 教科書が読めない 子どもたち

著 新井紀子

新井紀子 著

1620円 東洋経済新報社
☎03-5605-7021

AI vs. 教科書が 読めない子どもたち

AIに多くの仕事が代替された社会では、労働市場は深刻な人手不足に陥っているのに、失業者や最低賃金の仕事を掛け持ちする人々が溢れるという「AI恐慌の嵐に晒される」と警告する。

そのほか、RST能力値と旧帝大進学率との相関が非常に高いという結果が示される。超有名私立中高一貫校は、12歳の段階で高校3年程度の読解力のある生徒を入試でふるいにかける。

そのため、教科書や問題集を「読めばわかる」のだから、1年間受験勉強にいいしめば、旧帝大クラスに入學できてしまうと言うのだ。同時に、12歳以降でも、スマホの使用時間などはほとんど関係なく、読解力の向上はできると氏は言う。

評者は考える。多くの若者が、読解力不足のために「学習」を味わえない状態が続くならば、これは深刻な格差であり、社会問題と言っべきである。

（前聖徳大学教授・西村美東士）